

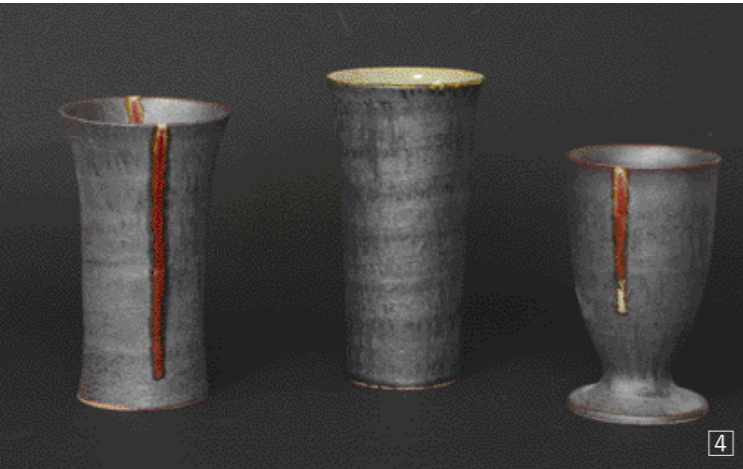
湘南の新窯元



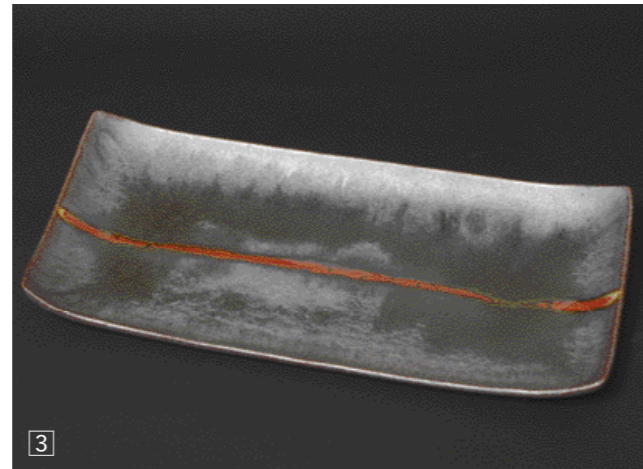
2



1



4



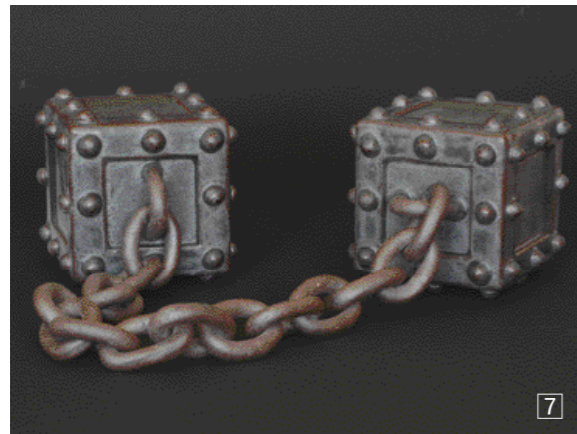
3



6



5



7

- ① 3点とも「フラワーポット」
左：高さ12.5cm、径8cm 中：高さ10cm、10×11cm 右：高さ9.8cm、径10cm
- ② 「千点文鉢」高さ15cm、径18cm
- ③ 「黒織部長皿」高さ3.5cm、32×15cm
- ④ 3点とも「黒織部フリーカップ」
左：高さ15cm、径8.5cm 中：高さ16cm、径8.3cm 右：高さ13cm、径7.5cm
- ⑤ 「酒器」
左：高さ4.5cm、径6.5cm 中：高さ4.5cm、径7cm 右：高さ21cm、径15.5cm
- ⑥ 2点とも「醤油差し」 左：高さ8.5cm、5.5×7.5cm 右：高さ8cm、8.5×6.5cm
- ⑦ 「Kusari」(箱のサイズ)高さ9.5cm、9.5×9.5cm



陶房 KEN の渡邊賢司さんは、5月24日～30日に横浜高島屋器百選ステージで「貫入青磁と黒織部」展を開いたばかり



湘南の新窯元
◇
6

茅ヶ崎・陶房KEN

渡邊賢司さん

黒織部を現代的に生かす

小学生のとき、民藝の巨匠バーナード・リーチの焼き物が好きになってしまった渡邊さん。
瀬戸を代表する名窯などで修行を重ね、小学生の頃に毎週通った陶芸教室がある茅ヶ崎で独立した。
制作しているのは古瀬戸、黒織部、辰砂などだが、通ってくる陶芸愛好家に瀬戸で体得した陶技やテクニックを惜しげもなく公開する。
そこには、自分を育ててくれた瀬戸とその焼き物の伝統に対する畏敬の念がふれている。

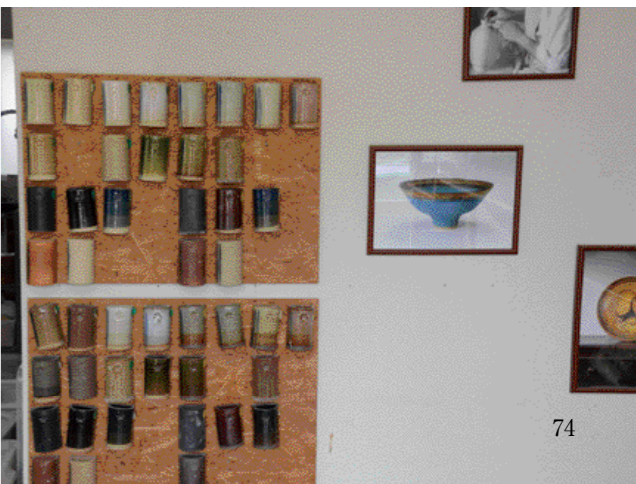


作陶指導を行う

伝統的な釉薬見本の横にはバーナード・リーチと茶碗のラインが好きだというルーシーの作品写真が……

PROFILE

- 1973年 神奈川県寒川町に生まれる
- 1991年 小田原城北工業高校デザイン科卒業
- 1992年 愛知県立窯業技術専門学校デザイン科修了
- 1993年 愛知県立窯業技術専門学校専攻科修了
- 2001年 二代加藤春鼎に師事
- 茅ヶ崎に陶房KENを開く
- 第27～29回東海伝統工芸展入選
- 第39回伝統工芸新作展入選
- 横浜高島屋で作品展
- 松屋銀座で個展、二人展、三人展
- ギャラリー 観で個展、二人展
- ギャラリー Deauvilleで個展、二人展





南部さんはアクセサリーを制作中

浸し掛けした釉薬を整える熊倉さん



渡邊さんと同じ「黒織部長皿」を制作中の内海孝夫は14年間通う78歳

ろくろでドリッパーを制作中の大蔵さん



余り土でタタラをつくる渡邊さん

たところに移転。前の工房のからは数百メートルの距離で、以前より2倍ほどのスペース。拝見して驚くのが、前の教室のときから通う陶歴10年以上を含めた陶芸愛好家に対する細部にわたる指導だ。渡邊さんは自身のオリジナル作品のコピーを認めているだけでなく、釉薬を浸し掛けするときはその秒数まで指示する。そうしないと渡邊さんの作品と同じものがないからだが、練込を制作されるかたにはさらに詳細を極めた指導を行う。制作したいと思われる色粘土をあらかじめ準備し、その

組み合わせ作業を間近で見守りながら指導するので、まったく歪みがない市松模様ができ上がるのだ。さらに、細かな作品を制作したときに発生する余り粘土に関しては、それを重ねたりつなぎ合わせたりしてタタラにし、再利用する技術を公開する。陶芸愛好家が長く通う理由の一つがそこにあるが、陶房KENには焼き物の聖地・瀬戸で培われた粘土などの陶芸原料つまり自然からいただいたものやその伝統に対する畏敬の念が貫かれている。

になり、2001年に茅ヶ崎に戻って独立した。瀬戸焼の本流に身を任せ、陶技や釉薬などの伝統を全身で吸収した渡邊さんが制作しているのは、古瀬戸、黒織部、辰砂など。但し、造形的な作品に掛けられることもある黒織部釉は、素人目には見分けが付きにくい。春鼎窯の十八番と言われる引出黒に使われる瀬戸黒釉とはまったく

別物だ。それらを15Kwの炉壁を厚くした特注の電気窯で強還元焔などで焼き、伝統的な釉薬のテイストを自分なりに現代的にアレンジしているのが渡邊さんの現在だ。

きめ細かく陶芸指導

2011年陶房KENは、茅ヶ崎駅から海岸に通じる道路に面し



電気窯には色見穴も付けられている



佐藤東魚先生の陶芸教室で制作した「あんこ玉入」

陶芸少年

瀬戸で修行し、2001年ザンビーチがさがきにほど近い東海岸地域に「陶房KEN」を開いた陶芸家・渡邊賢司さん。隣接する寒川生まれだが、小学生の頃からマリンスポーツが盛んで多くの観光客が訪れる茅ヶ崎と焼き物で結ばれていた。

今年44歳になる渡邊さんは、1943年茅ヶ崎の北に位置する寒川町に生まれた。父親は、自動車メーカーでドア部品などの製造に携わっていたサラリーマン。そんな家庭環境で育ったためか、ものづくりが好きになった渡邊少年が連れて行かれたのが、民芸の

巨匠で人間国宝の濱田庄司らと深い親交があったバーナード・リーチの展覧会。7歳のときのことで、今でも工房に大切に保管されているその図録によれば、主催は大原美術館と朝日新聞社で会場は日本橋の三越美術館。そして渡邊少年は、母親に手を引かれて行ったリーチ展で、焼き物がいっぺんに好きになってしまった。

以来、鎌倉などで開かれている体験教室にたびたび顔を出すようになり、小学校の5、6年生のころには、現在も茅ヶ崎で活躍する女流の佐藤東魚先生の陶芸教室に行くほどになっていた。しかし、授業がある渡邊少年が通うことが許されていたのは、土曜の午後だけ。その頃に制作されたのが掲載の蓋付きの「あんこ玉入」だが、後に陶芸家として同じ茅ヶ崎で独立した渡邊さんと二人展を行なったこともある佐藤先生によると、渡邊少年は休み時間も取らずに焼き物にとりつかれたように制作していた、ということだった。蓋付きであれば、その段取りはなお難しくなるはずで、渡邊少年はそれをテクニクと集中力でカバーした。

黒織部を現代的に

渡邊さんは、陶芸の道を歩むために高校ではデザインを専攻し、さらに愛知県立窯業技術専門校に進んだ。ご両親も納得の進路で、専攻科修了と同時に瀬戸の二代加藤春鼎に師事することができた。加藤家の先祖は、鎌倉時代の藤四郎景正までさかのぼることができる。曹洞宗の開祖で永平寺を開いた道元の南宋行きに同行し、そこで習得した焼き物を瀬戸の土で始め、瀬戸焼の開祖とされる人物だ。初代加藤春鼎は景正の25世にあたり、明治に分家して現在に至っている。

渡邊さんは二代に師事したが2年後に急逝。その後3年ほどお礼奉公のつもりで窯を手伝い、その後二代の弟子筋に3年ほどお世話



左から、12年通う南部美奈子さん、同13年の大蔵 選さん73歳、同2年の熊倉千晴さん